

# 兵庫県豊岡市

豊岡市の中心部には、鞆づくりに従事する企業、鞆に関連する企業が100社以上点在しています。

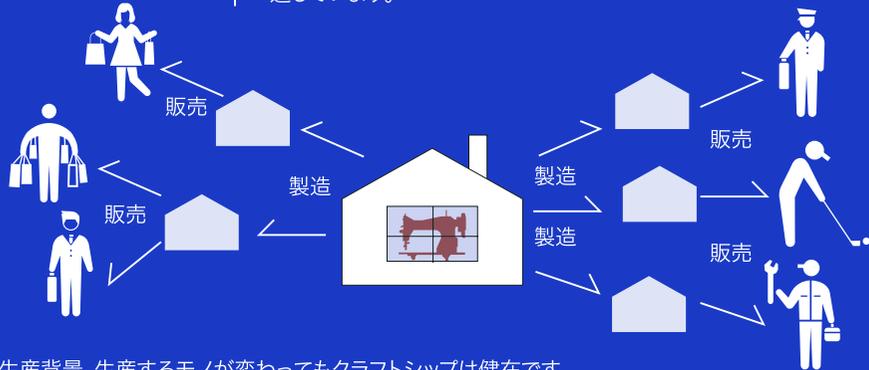
豊岡は千年の伝統を持つ鞆の産地です。「鞆の街 豊岡」は、奈良時代から始まる柳細工を起源とし江戸時代に柳行李生産の隆盛をむかえ、大正以降はその伝統技術と流通経路を基盤に、新素材への挑戦とミシン縫製技術の導入により鞆の生産地となりました。



豊岡市は兵庫県北部の中心都市です。野生コウノトリの生息地として知られ、コウノトリの保護繁殖・共生事業が行われ、竹野浜などの海水浴場、神鍋高原のキャンプ場・スキー場、出石の城下町、風情のある城崎温泉など、観光施設・観光資源が非常に豊富です。

## 国産鞆の大工場 豊岡の鞆産業

鞆はファッションアイテムの他、スポーツ用の鞆、作業用等の特殊鞆、車掌さんの鞆など様々な用途の鞆があります。すべての鞆を含めて豊岡は国産鞆の約7割を製造していると言われています。その大部分はOEM製造と言われる他社ブランドの製品を製造しています。



※生産背景、生産するモノが変わってもクラフトシップは健在です。

- ◇ 関東方面 (5 時間程度)  
東京～京都～豊岡  
※京都から特急電車にて
- ◇ 関西方面 (2 時間半程度)  
大阪・京都～豊岡



# 靴づくり - 豊岡の技術とプライド -

## 靴製造の流れ

商品企画から製造、検品まで一括対応で高品質を実現。



## 職人のこだわり

靴づくりには、経験を積んだ職人の技術が不可欠。



バッグ作りは、何といても、人間の手によって作られます。靴の製造技術は、簡単には習得することは出来ません。長い経験の積み重ねによって、人から人へ受け継がれ育ってきます。様々なタイプの工業用ミシンを使って、そして多様化する靴デザインや素材を扱えるのも長年の歴史が培った職人の技です。

## 機械との両立

職人の技術と機械設備。いずれも併せ持つ靴産地。

近年では、職人の技と同じように近代的な生産技術が豊岡の靴づくりを支えています。靴のパターンをコンピュータで行い、裁断加工までのCAD・CAMシステムの採用、縫製を支援するコンピュータミシンなど、最新のシステムを導入しています。



## 靴作りの責任

細心の検品にて供給。修理やアフターメンテナンスも対応。



品質管理については大変重要視しており、企業のなかには国際的な品質管理システムを取得したり、過去のデータを検討し独自の検品システムを構築するなど各企業が努力し続けています。これも生産地としての責任です。



植村美千男の修理工房主宰、靴職人 **植村 美千男**

豊岡の製造企業の多くは、二代三代にわたり靴産業に従事している。また、昔はミシンを踏んでいた、縫製の内職をしていたというお年寄りも豊岡には数多い。靴づくりは積み重ねであるが、従事している方が多いことは、靴の街の特別な財産である。靴製造企業には今では製造されていないミシンが残されているが、そのミシンでしか縫製でない靴がある。植村氏は、今では作り手も少なく、作ることも難しい柳行李を修理できる数少ない靴職人である。

## 2 奈良の正倉院に上納

奈良時代に豊岡でつくられた「柳篋（やなぎかご）」は正倉院に上納されています。1473年の「応仁記」には、豊岡市の九日市（コノカイチ）に「九日市場」が開かれ、柳こおりが商品として盛んに売買されていた記述があります。おそらくこの時期から、地場産業として家内手工業的な杞柳産業が発展したことが予想されます。



## 4 柳こおりから豊岡の鞆へ

豊岡の鞆としては、1881年八木長衛門が第2回国勲業博覧会に2尺3寸（約70cm）入り、3本革バンド締め「行李鞆」を創作出品したことが始まりと伝えられています。この3本革バンド締め「行李鞆」は、外観はトランクと同じでしたが、トランクと呼ばれずに「行李鞆」と呼ばれていました。このことは、これが従来の杞柳製品の改良品で、柳行李で名高い豊岡で作られたことが、鞆と呼ばれずに行李と呼ばれた原因と言われています。



## 6 鞆産業が地場産業へ

1953年、従来のスーツケースの胴枠を改造し、外型崩れ防止にピアノ線を使用した鞆が生まれました。軽くて強靱であることなど、これまでの欠陥を補っていたので他商品を圧倒しました。「岩戸景気」（1958～1961年）を背景に、豊岡市に300を越える鞆関連企業が生まれ、全国生産の80%のシェアを占めるまでに発展しました。こうして、カバン産業が豊岡市の地場産業となったのです。



2006 特許庁に地域団体商標として「豊岡鞆」が認定される

27 但馬を拓いたと言われ柳編みの技術を伝える

れるアメノヒボコノミトが

<<

27

712

1473

1580 羽柴秀吉の但馬平定により杞柳産業としての歩みが始まる

1668



1893 シカゴ万国博覧会で柳製品が銀賞を受賞する

1881

1900 パリ大博覧会で柳製品が銀賞を受賞する



1925 5月23日に発生した北但大震災と世界恐慌により大打撃を受ける

1936

1953

ショックを受けて内需型へと切り替える。  
1971 ニクソン輸出から



2014

## 1 豊岡の鞆のルーツ

それは神話の時代に遡るのですが、新羅王子とされる天日槍（アメノヒボコ）によって、柳（やなぎ）細工の技術が伝えられたとの伝承が、712年の「古事記」にあります。豊岡の鞆のルーツは、その柳細工で作られたカゴだと言われています。また、菅原道真（843～903）の「筑紫の配所への行列の絵巻」の中で、牛の背に行李が見られます。

## 3 江戸時代には

豊岡藩の独占取扱品として、柳こoirの生産が盛んになりました。1668年、京極伊勢守高盛が丹後国から豊岡に移封され、柳の栽培並びに製造販売に力を注ぎ、土地の産業として奨励したのが始まりです。豊岡から大阪を経由して全国にその販路が出来上がり、幕末には、大骨柳屋・飯骨柳屋・仲買・縁掛屋などの流通・販売機構も整い、全国的名声を築きました。

## 5 素材がファイバーへ（紙を圧着したもの）

1936年に開催されたベルリンオリンピックの選手団のかばんとして、豊岡のファイバー鞆が採用されるなど、この頃には、「ファイバー鞆」が、豊岡かばんの主流を占めるようになりました。しかし、1937年に日中戦争、1941年に太平洋戦争と戦火が拡大するにつれて材料の確保が困難になり、材料の購入・販売など統制しなくてはならなくなりました。

## 7 かばんを核とするまちづくりへ

「豊岡鞆」ブランドをきっかけに製造中心のかばん産業から製造と地域を活かしたかばんの街へと変わる取組みが動き出します。特に職人育成に力をかけられ、2013年には鞆縫製者育成トレーニングセンター、2014年には「豊岡鞆」旗艦店 Artisan T を併設した Toyooka KABAN Artisan School が開校され地域全体で従事者を増やす努力、技術力アップを目指します。

## 鞆の街の風景



### カバンストリート

鞆専門店や鞆修理店等のショップが軒を連ねる。街路には鞆をモチーフにしたオブジェや鞆の自動販売機が設置されている。



### Toyooka KABAN Artisan Avenue

2014年にオープンした豊岡の鞆の拠点。1階は地域ブランド「豊岡鞆」製品を中心に豊岡で生産された鞆、財布、小物等を取り扱う専門店



### 柳の宮(かばんの神社)

豊岡の鞆づくりのルーツである柳編みのコリヤナギを祀った神社。年に1回鞆の祭り「柳まつり」が開催される。



### 但馬地域地場産業振興センター 2F 歴史資料室

杞柳産業から鞆産業への移り変わりを、当時の資料や製品を展示し、紹介されている。

## 職人が育つ環境



### Toyooka KABAN Artisan School

鞆職人を目指し、1年間1400時間のカリキュラムが設置された鞆の専門学校。基礎から企画まで鞆作り全般を指導し、卒業後は豊岡の鞆企業へ就職する生徒も多い。



### 鞆縫製者トレーニングセンター

鞆縫製(縫うこと)に特化した職業訓練施設。3ヶ月の訓練後、豊岡の各企業へと就職。